

岡本発奮「次は自分」

8回途中3失点の力投

燃えないわけがなかった。八学光星の先発マウンドを託された岡本琉奨（16）は、同じ2年生左腕・洗平比呂（16）の初戦の完封劇を目の当たりにし、「自分も負けられない」と発奮。立ち上がり1点を失ったものの、威力ある直球を武器に八回途中まで3失点と力投し、チームに勝利をもたらした。

昨年はスタンドから見つめた真っさらな夢のマウンドに初めて立った。見たこともない数の観衆、声援の大きさ。初回は「緊張があった」と制球を乱し、安打に2四死球で満塁とされ、内野ゴロで1点を失った。それでも百戦錬磨の仲井

文星芸大付戦に先発し、8回途中までを3失点と粘投した八学光星・岡本・甲子園

宗基監督が「必ずやってくれると信じて先発を任せたい」と言い切るサウスポー。二回以降は変化球を狙う相手の裏をかき、捕手藤原天斗（17）のミットが「バシッ」と響く140キロの重い直球を次々と放った。走者を背負っても自慢の直球で三振を奪って切り抜け、「思い通りのヒッチングはできた」と振り返った。

春は背番号「1」を背負い、夏連覇が懸かる仙台育英を破って東北王者に輝いた。甲子園では洗平にエースナンバーを譲ったが「マウンドが上がったら、俺がエースだ」という気持ちで投げている。

12日の初戦は、その洗平が県勢では1968年の三沢・太田幸司以来、55年ぶりに2人目の2年生完封を達

成。「次は自分がやってやる」と臨んだ一戦で試合をつくった一方、「（洗平）比呂を休ませるためにも一人で投げ抜きたかったが、後半はバテてしまった」と、手心えの中に途中降板の悔しさもにじんだ。

指揮官が「洗平は切れ、岡本は剛球」と評するタイプの異なる両左腕。この日は校歌を歌い終えた後に、「ごめん」（岡本）、「オーケー。ナイスピッチ」（洗平）と短く会話を交わした。「練習ではライバルでも、試合ではどっちもいいヒッチングをしなければ勝てない。切磋琢磨できる比呂が同じ学年でよかった」と岡本。互いに支え合う2人の熱投が、高校野球の聖地をさらに盛り上げる。

（本田海輝）